令和５年７月１日

日本道徳教育学会第101回（令和5年度春季）大会

於：新潟青陵大学

令和の日本型学校教育における道徳教育と「特別の教科道徳」の位置づけ・役割・展開

ー日本型学校教育の根幹に着目してー

武庫川女子大学　　押谷由夫

話の大筋

特に次の３点に絞ってお話しします

１．日本型学校教育のよさをどう押さえるか

２．令和の社会と課題をどう押さえるか

３．令和の日本型学校教育における
　　道徳教育、「特別の教科　道徳」の課題と対応

１．日本型学校教育のよさをどう押さえるか
（知・徳・体の全人教育、全員への教育保障）

１－１　中央教育審議会答申より

※「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（2021.3.26）

「**一人一人の児童生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要**」であるとする。そして、2020年代を通じて実現すべき教育として、**個別最適な学びと協働的な学びを統合**させる「**令和の日本型学校教育**」を提唱している。

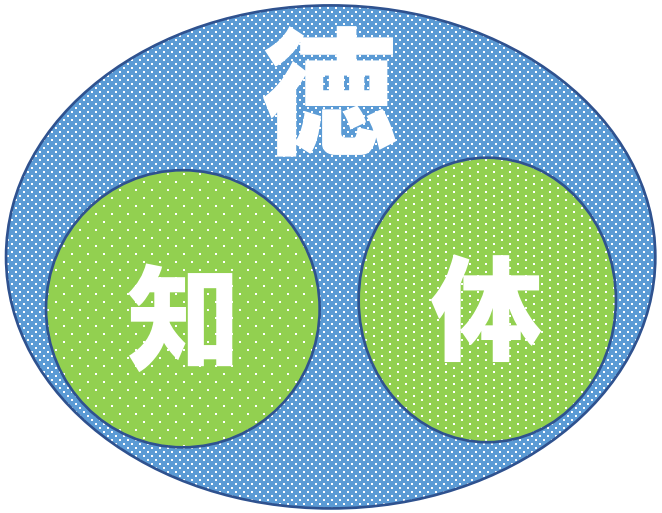
１－２　改正教育基本法（２００６．１２）から
ー道徳教育が教育の根幹に位置づくー

・第１条　教育の目的　「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

・第２条　教育の目標　「一　幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな体を養うこと。　二～五は　学習指導要領の道徳の内容項目に関連する内容が示されており、語尾はいずれも「態度を養う」となっている。

・第３条　生涯学習の理念　「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」

★　知、徳、体の関係



・徳･･･人間としてよりよく生きる力
・知･･･知識、技能
　　（思考力、判断力、表現力、等を含む）
・体･･･健康、体力

「人間を道徳面で教育しないで、知識面でのみ教育すると、社会に脅威を生み出すことになる」

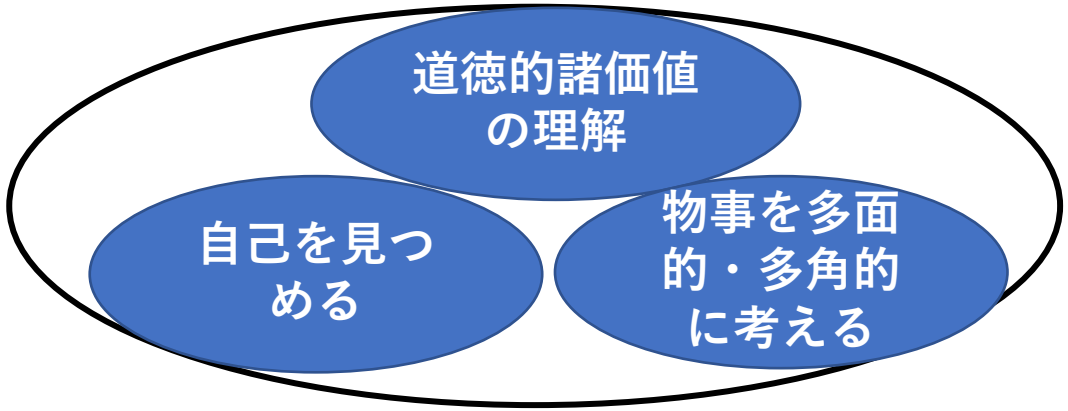
セオドア・ルーズベルト

アメリカ第26代大統領〈1901～1909〉

アメリカ人初のノーベル平和賞受賞

１－３　道徳教育,「特別の教科　道徳」の目標、内容、評価

１－３－１　道徳教育と「特別の教科　道徳」の目標



人間として
自分らしくどう生きるか

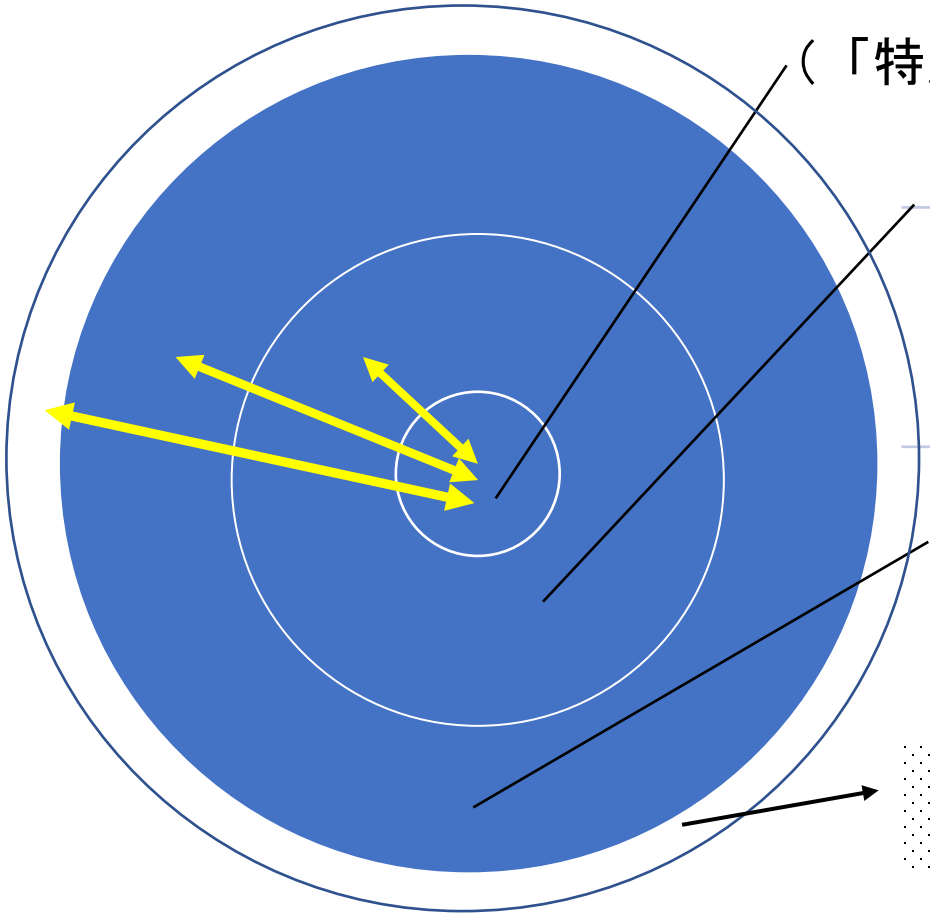
「特別の教科道徳」を要として

よりよい自分と社会を創っていく

主体的に判断し行動する
（生活や学習の中で追い求める）

自律的に道徳的実践のできる子どもたちを育てる

※　道徳教育の全体と「特別の教科道徳」の関係



道徳的判断力、心情、意欲・態度

（「特別の教科　道徳」を中心に計画的・発展的に育成）

道徳的知識、方法

（各教科、特別活動、総合的な学習の時間等の特質に応じて育成）

道徳的実践（かかわりを豊かにすること）

（日常生活や様々な活動を通して育成）

道徳的環境
（道徳的風土）

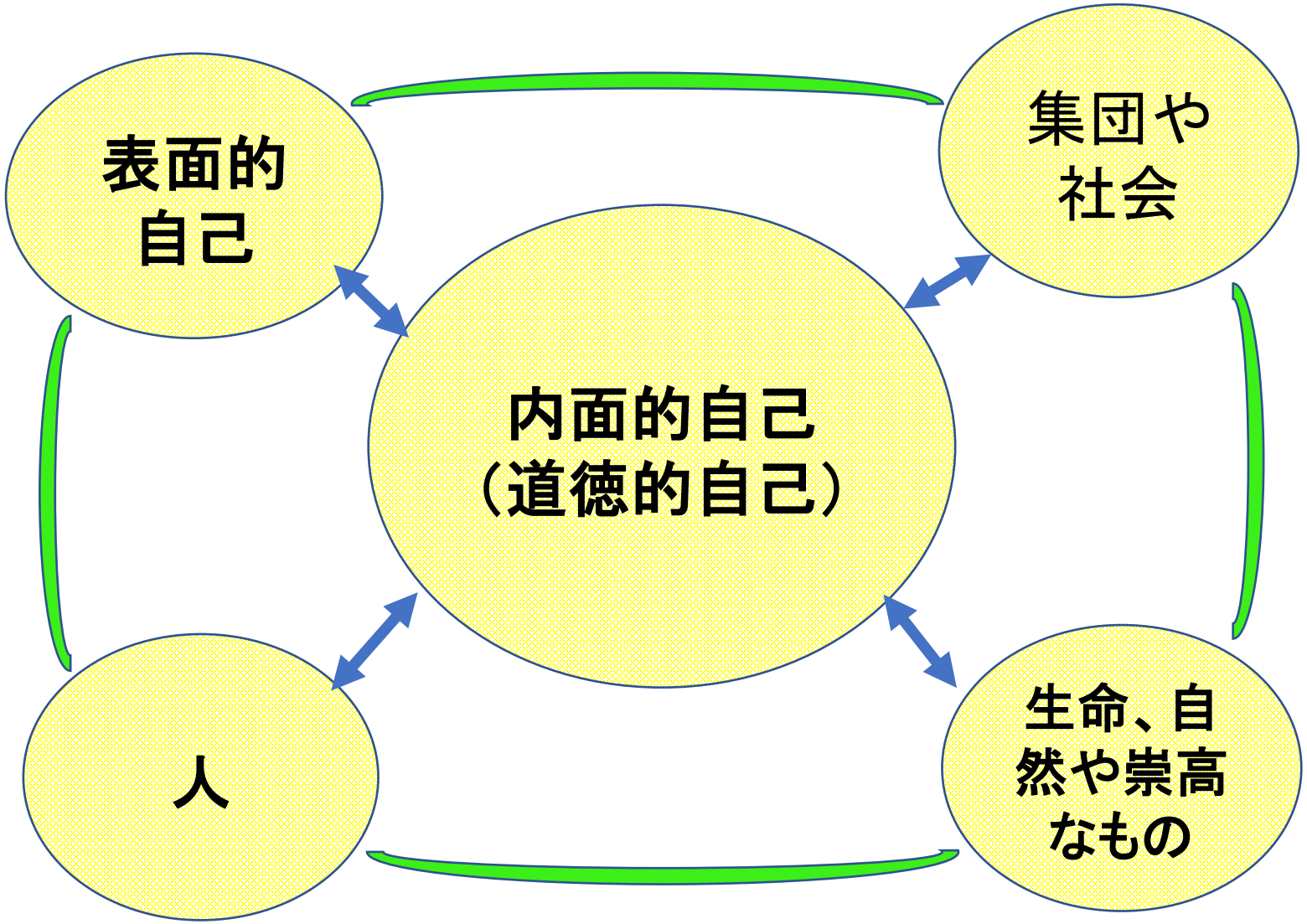
１－３－２　道徳の内容

道徳性はかかわりを豊かにすることから発達すると捉え、その主なかかわりを４つ（自分自身、人、集団や社会、生命・自然や崇高なもの）にまとめ、それぞれのかかわりを豊かに持つための心構え（姿勢）として内容項目が示されている

※　内容項目は実際の生活において自分（自分たち）を成長させるかかわり（自分、人、集団や社会、生命・自然や崇高なもの）を豊かにし、自己形成を図る窓口となるもの

★『小学校（中学校）学習指導要領』の「第3章　特別の教科　道徳」の「第3　指導計画の作成と内容の取扱い」の「２　第2の内容の指導に当たっては、次の事項に配慮するものとする。」の中の「（３）児童（生徒）自ら道徳性を養う中で、自らを振り返って成長を実感したり、これからの課題や目標を見付けたりすることができるよう工夫すること。その際、道徳性を養うことの意義について、児童（生徒）自らが考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるようにすること。（また、発達の段階を考慮し、人間としての弱さを認めながら、それを乗り越えてよりよく生きようとすることのよさについて、教師が生徒とともに考える姿勢を大切にすること。）」〈（　）内は中学校〉と明記されている。

※　内面的自己（道徳的自己）と4つのかかわりと内容項目の関係



内容項目を窓口にしてかかわりを深める

それぞれがかかわりをもっており、内容項目もそれぞれのかかわりに関係してくる

★子どもたち一人一人がそれぞれに発展させた道徳的価値意識を多様に活用し統合しながら具体的な道徳的課題や状況に対応できるようにする。そのこと自体が道徳性の発達である

１－３－３　「特別の教科　道徳」の評価

従来の評価観を180度転換することを求めている

『小学校（中学校）学習指導要領』の「第3章　特別の教科　道徳」の「第3　指導計画の作成と内容の取扱い」の中の「４　**児童（生徒）の学習状況や道徳性に関わる成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める**必要がある。ただし、数値等による評価は行わないものとする。」と明記されている

※教えたことをどの程度理解し身に付けたかを中心とする評価観から
子どもたちが本来もっているよりよく生きようとする心をいかに目覚めさせ、引き出したかを中心とする評価観へ

★　**個人内評価で成長した道徳性を記述式で示し一人一人を勇気づける**

★　**子どもたち自身が自己評価・自己指導を深めていけるようにすることが大切**

★　**子どもたちのよりよく生きようとする心に関する「よいところ探し」が評価**

１－３－４　道徳教育を充実させることで人間観、指導観、評価観を変えていく

人間観

誰もがよりよく生きようとしている
（子どもへの信頼、リスペクト）

指導観

多様な主体的・対話的な学びを通して子ども自身が内なる力（よりよく生きる力）を伸ばしていくようにする

評価観

一人一人のよりよく生きる心や力の成長を評価する（自己評価・自己指導につなげる）

★　子どもを主体としたこれからの学校教育の原点が示されているととらえられる

１－４　改訂学習指導要領が特に求めていること

１－４－１　改訂に込められた思い（文科省　ホームページより）

学校で学んだことが，子供たちの「生きる力」となって，**明日に，そしてその先の人生につながってほしい。**これからの社会が，どんなに変化して予測困難な時代になっても，**自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，判断して行動し，それぞれに思い描く幸せを実現してほしい。**そして，**明るい未来を，共に創っていきたい。**「学習指導要領」には、そうした願いが込められています。

- **何ができるようになるの？（資質・能力の三つの柱）**
- **どのように学ぶの?（主体的・ 対話的で深い学び）**
- **カリキュラム・マネジメント**
  （カリキュラム・マネジメントを確立して教育活動の質を向上させ，学習の効果の最大化を図ります。）
- **社会に開かれた教育課程**
  （保護者の皆さまや地域の皆さまのお力添えをいただきながら，よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を達成していきます。）

１－４－２　新教育課程で求められる資質･能力の三つの柱

①　「何を知っているか、何ができるか」（個別の知識・技能）
②　「知っていること・できることをどう使うか」
（思考力・判断力・表現力等）
③　「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」
（学びに向かう力、人間性等）

すべての学びが人間としてよりよく生きることへと
方向づけられることが大切である

つまり、モラル・アクティブ・ラーナーを育てることが目標となる
（そのための学びが、モラル・アクティブ・ラーニングである）

１－４－３　主体的・対話的で深い学びとは

主体的 → 自ら興味関心（問い）をもって取組むこと

対話的 → 様々な対象（他者）と双方向的な関わりをもつこと

深い学び → より深く自らに問いかけ、興味関心や双方向的な関わりを深めて、学びをよりよい自己、よりよい社会の形成へと発展させていくこと

★　深い学びとは、主体的で対話的な学びを通して自らの生き方（よりよい自己形成とよりよい社会づくり）に深く関わっていく学び

※　新教育課程をリードする道徳教育

新教育課程のポイント

1．3つの資質能力の柱の育成
（知識技能、思考力･判断力･表現力等、学びに向かう力等）
2．主体的・対話的で深い学び
（アクティブ・ラーニング）
3．カリキュラム・マネジメント
（社会に開かれた教育課程）
4．チーム学校
（地域や専門機関と連携し学校課題に取り組む）

道徳教育のポイント

1．人格の基盤となる道徳性の育成
（モラル・アクティブ・ラーナー）
2．「特別の教科　道徳」が要の役割
3．考え、議論（対話）する道徳
4．子どもたちのよさを伸ばす教育
（よさを評価し励ます）
5．学校教育の中核としての道徳教育
（学校経営、学級経営の中核）
6．社会的・個人的課題への主体的対応）
（総合単元的な道徳学習等）
7．学校、家庭、地域連携
（チーム学校）

２．令和の社会と教育の課題をどう押さえるか

２－１　Society.5.0社会の実現に向けた学校教育

Society5.0（超スマート社会）

サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、**人間中心の社会。**

文科省の取組

共通して求められる力として「**文章や情報を正確に読み解き対話する力、科学的に思考・吟味し活用する力、価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力**」を求めている（「Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会報告」平成30年6月5日）

「**GIGAスクール構想**」を立ち上げ、「**１人１台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備**することで、特別な支援 を必要とする子供を含め、**多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化さ れ、資質・能力が一層確実に育成できる教育環境を実現する**」としている。

２－２　OECD（Education2030project）からの「ラーニング・コンパス」（学びの羅針盤）の提唱

「個人のウェルビーイングと集団のウェルビーイング」に向けた「進化し続ける学びの枠組み」の提案

知識、スキル、態度と価値観が、より良い未来の創造 に向けた変革を起こすコンピテンシーとして重要（基盤）

①新たな価値を創造する力　②対立やジレンマに折り合いをつける力　③責任ある行動をとる力が大切

そのためには「見通し（Anticipation）、行動（Action）、振り返り （Reflection）のAAR サイクル」を重視

※　エージェンシー（自分の未来を自分〈自分たち〉で創る力）の育成

「生徒エージェンシー（Student Agency）」

変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力

＋

「共同エージェンシー(Co-Agency)」

「仲間や教師、家族、そしてコミュニティに囲まれ、それらの人たちがウェルビーイングに向けて生徒と相互作用して生徒を導いていくこと

↓

★　個人と社会（集団）のウエルビーイングを目指して子どもたちが主体的に責任を持って行動できるようにする。そのことを共通目標として、教師が子どもたちと一緒に主体的に行動し学びの環境を創る

★　「学びの羅針盤」で大切なこと

○　子どもも教師も、親も地域の人々も北極星にあたる指針となる目標をもつ
（**全ての学びを自分もみんなも幸せに生きられる社会創りへと向ける**）

○　子どもたち一人一人が自分で計画を立て取り組む
（**一人一人が学びの地図を創り目標に向けて学びを発展させる**）

○　教師や保護者も同じ北極星を目指して、子どもたちの計画を支援したり協働したりして追い求める。そこに一体感が生まれ道徳的環境を創っていくことになる
（**教師も目標を共有し、支援の地図を創り一体的に追い求める**）

※　Education2030プロジェクトと日本の学習指導要領改訂について

白井俊『OECDEducation2030プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房　2020　より

　Education2030プロジェクトのコンピテンシーの構成要素の３つのドメイン（領域）と日本の学習指導要領における資質能力の3つの柱には大きくかかわりあう部分があるとし、その背景には、Education2030プロジェクトにおける日本の積極的参加があると指摘している。

　「態度及び価値観」については、否定的意見も多かったが、日本がその重要性について主張し続けたことで、ヨーロッパ社会でのテロの頻発等もあり、支持されるようになった経緯が書かれている。

　また、「態度及び価値観」は「学びに向かう力、人間性等」と重なるものであるが、社会・情動的スキルやメタ認知スキルにも重なるものがあると指摘している。

２－３　2030年以降の社会をどう捉えるか

2030年の社会予測からの新たな変化

VUCA（予測困難で不確実、複雑であいまい）な時代が加速

・世界的な新型コロナウイルス感染
・ロシアのウクライナ軍事侵攻、そのための世界的混乱
・中国の台頭、東アジアの飛躍的成長（日本の低成長）
・チャットGPTの開発など生成AIの発達　　等

求められる対応

・突発的な世界的危機（混乱）や急激な世界の変化への対応（対策や解決への協働等）
・急激な技術革新への対応（再生エネルギー、食糧、医療、介護等）
・急激な社会構造や生活文化の変化への対応
　　（少子高齢化、５G、６G、共生等）
・AIの発達による危険な活用への対応（自己規律等）　　等

※　次期教育振興基本計画について（答申）　〈概要〉

令和5年3月8日　中教審

次期計画のコンセプト

2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成

・**将来の予測が困難な時代**において、未来に向けて**自らが社会の創り手**となり、課題解決などを通じて、**持続可能な社会**を維持・発展させていく

・**社会課題の解決**を、経済成長と結び付けて**イノベーション**につなげる取組や、一人一人の**生産性向上等**による、**活力ある社会の実現**に向けて「**人への投資**」が必要

・**Society5.0**で活躍する、主体性、リーダーシップ、創造力、課題発見・解決力、論理的思考力、表現力、チームワークなどを備えた人材の育成

日本社会に根差したウェルビーイング（※）の向上

・**多様な個人**それぞれが**幸せや生きがい**を感じるとともに、**地域や社会**が**幸せや豊かさ**を感じられるものとなるための教育の在り方

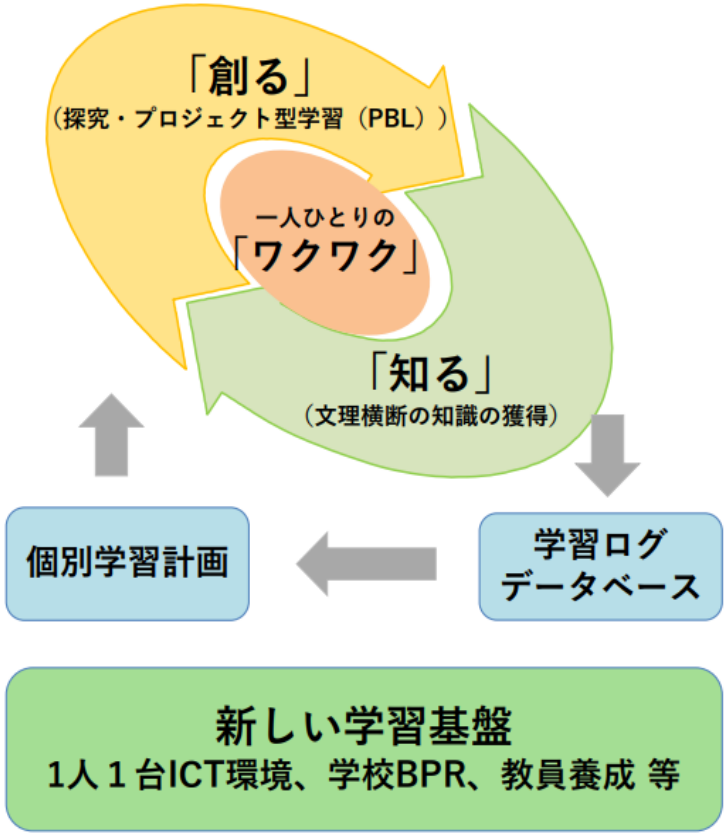
・幸福感、**学校や地域でのつながり**、利他性、協働性、**自己肯定感**、自己実現等が含まれ、協調的要素と獲得的要素を調和的・一体的に育む

・**日本発の調和と協調**（Balance and Harmony）に基づくウェルビーイングを発信

※身体的・精神的・社会的に良い状態にあること。短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。

※　経済産業省が進める「未来の教室」のコンセプト

※経済産業省公表資料より



1．学びのSTEAM化
「創る」ために「知る」学びへの転換
（カリキュラム・マネジメント）

2．学びの個別最適化
一人ひとりが自分のペースを作る学びへ

１人１台パソコン環境
⇒教育EBPMの入口

★　文部科学省、経済産業省、デジタル庁が一体となってGIGAスクール構想に基づく教育DX（デジタル・トランスフォーメーション）に取り組んでおり、一層加速される

※浅野大介『教育DXで「未来の教室」をつくろう』学陽書房　2021　より

目指す「未来の教室」について、推進リーダーである浅野大介氏（経済産業省産業資金課長、前サービス政策課長・教育産業室長・スポーツ産業室長）は、次のように述べている。

「それは、居場所や学年や時間の制約も受けず、一人ひとり違うトレーニングプランを先生との『約束と習慣』のもとで主体的に実行する、新しい学びの姿です。

そして、日常生活や社会課題や先端科学などの『ホンモノの課題』に向かい、同じ課題に向かう学校内外の仲間との協働で、『ヨコ割り』の探究と『タテ割り』の教科知識がつながる。そんな（略）生きた学びを、様々な職能に分化されたたくさんの指導者・支援者が『チーム』で助けてくれる学校の姿です。」（19頁）

※　竹田ダニエル『世界と私のA to Z』講談社2022より

竹田ダニエル氏は、1997年カリフォルニア生まれ。あらゆるメディアに抜擢されているZ世代の新星ライター。

- 「Z世代」とは、一般的には1990年代後半から2010年ごろまでの間に生まれた世代のことを指す。
- 私はそもそも「Z世代」というのは生まれた年月で区切られるものではなく、「社会に対して目を向け、常に自分と向き合い、だれもがより良い社会を目指すべきだという”価値観“」で形成される「選択可能」なものではないかと考えている。
- 「Z世代的価値観」とは、膨大な情報量と「繋がり」を駆使する能力を持ち、自分たちの世代で物事を変えていこうとする当事者意識を持ったことによって生まれた新しい価値観である。今まで分断を引き起こしていた壁を崩壊させ、多様で新しい価値観に誰もがアクセスできる中で、目まぐるしく変化する社会に抵抗するのではなく、前向きに学び合い、受け入れることを可能にする。

３　令和の日本型学校教育における道徳教育、「特別の教科　道徳」の課題と対応

※　検討したい3つの課題と対応

（１）未来への肯定的感情を育む（絶対的信頼感の確立）

不安感をどう軽減し、未来への希望へとつなげていくか。そのためには、自分自身、他の人、集団や社会、生命や自然・崇高なものに対し絶対的信頼感を培うことが大切

（２）自己の成長を確認できる取組を継続する（自己形成ノートによるリフレクション）

絶対的信頼感を持つと同時に、自分の成長を実感し学び続けることが課題。失敗したり不信感、不安感に陥っても、それを乗り越えて成長する自分の自覚と目標をもって計画的に様々な課題にチャレンジし乗り越える体験が大切

（３）多様性を受容しともによりよい自己、よりよい社会を目指す道徳力を育む
（多様な教材、多様な課題、多様な思考、多様な学習形態による学び）

激変する社会にどう生きるかが課題。社会の実態や課題を理解するとともに、グローバル化が進む社会において、協働してよりよい社会を切り拓いてためには、多様性を受容することが大切。そして同時に、共通性（共通課題）を確認することから、協働してその獲得に取り組んでいく力が必要

★　これらの学習において一人一台端末の利活用を工夫する

３－１　未来への肯定的感情を育む

絶対的信頼感を形成するには

１．心身の安定

・マインドフルネス、リラックス運動、生活リズム　等
・集団（他者）からの承認、自然体験　等

２．幸せ感

・ストレスホルモン（コルチゾール、ノンアドレナリン等）が出る状況を少なくし、幸せホルモン（オキシトシン、セロトニン、ドーパミン等）が出る状況を多くする　等
・自己達成感、自己有用感　等

３．未来への希望、夢

・勇気づけられる事実や話、心に響く事実や話、豊かにイメージできる世界　等
・あこがれる人物、モデルとなる人物　等

（授業の前の学び）	（道徳の授業での学び）	（授業後の学び）
心地よさを実感する体験（感覚器官を通して） 人間の特質の理解（教科での学習を通して）	人間として生きる喜び・人間への信頼・自分への信頼、尊厳へ	習慣形成へ エクササイズへ 学級創造表現活動へとつなぐ（学級経営）等
人とのかかわりで嬉しかった体験・集団や社会とのかかわりで嬉しかった体験・生命、自然や崇高なものとのかかわりで感動した体験	かかわりの中で生きる人間、それらに支えられて生きている自己の自覚へ	かかわりを豊かにする実践へ 他者を支える実践へ 夢や希望を追い求める体験へ　等
様々な分野で活躍する（活躍した）人物に関する学習 身近な人の生き方に関する学習	未来を拓いていく人物の生き方から自分の生き方を学ぶ	魅力的な人物についての学びを深める 常に対話をする　等

３－２　自己の成長を確認できる取組を継続する（自己形成ノートによるリフレクション）

自己の成長を実感する学び

頭の成長・・・知識、見方・考え方、思考方法、応用力等の発達

心の成長・・・道徳的価値意識の深まり、非認知能力等の発達

体（行動）の成長・・・身体能力、行動（実践）能力等の発達

この学びを記録し、自己を見つめ、成長を実感し、課題を見出し、自ら取り組もうとする

みんなと協働しながら自分と社会の未来に希望と夢を描き追い求める

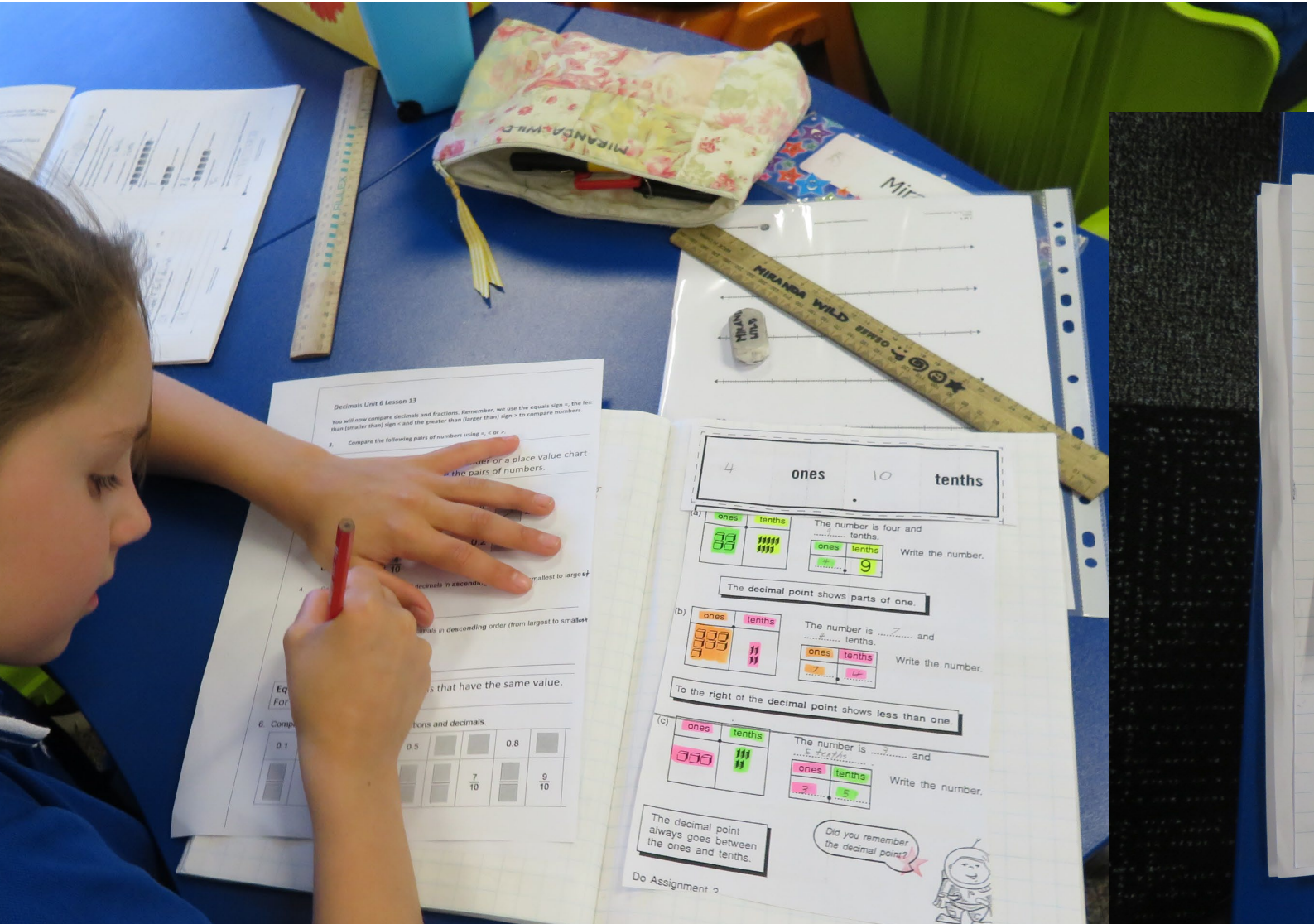
（授業の前の学び）	（道徳の授業での学び）	（授業後の学び）
日々の生活の記録 日々の学習（授業）の記録	・継続することの大切さの自覚へ ・成長（心と頭と体）の自覚へ	記録を継続し、リフレクションしながら成長を実感する
興味あることに取り組み成し遂げる体験（自分で、自分たちで） 難しい課題に取り組む体験（自分で、自分たちで）	・努力すること、挑戦することで成長することの自覚へ ・新しい自分の発見	自分で課題を見つけ継続的に取り組み成長を実感する

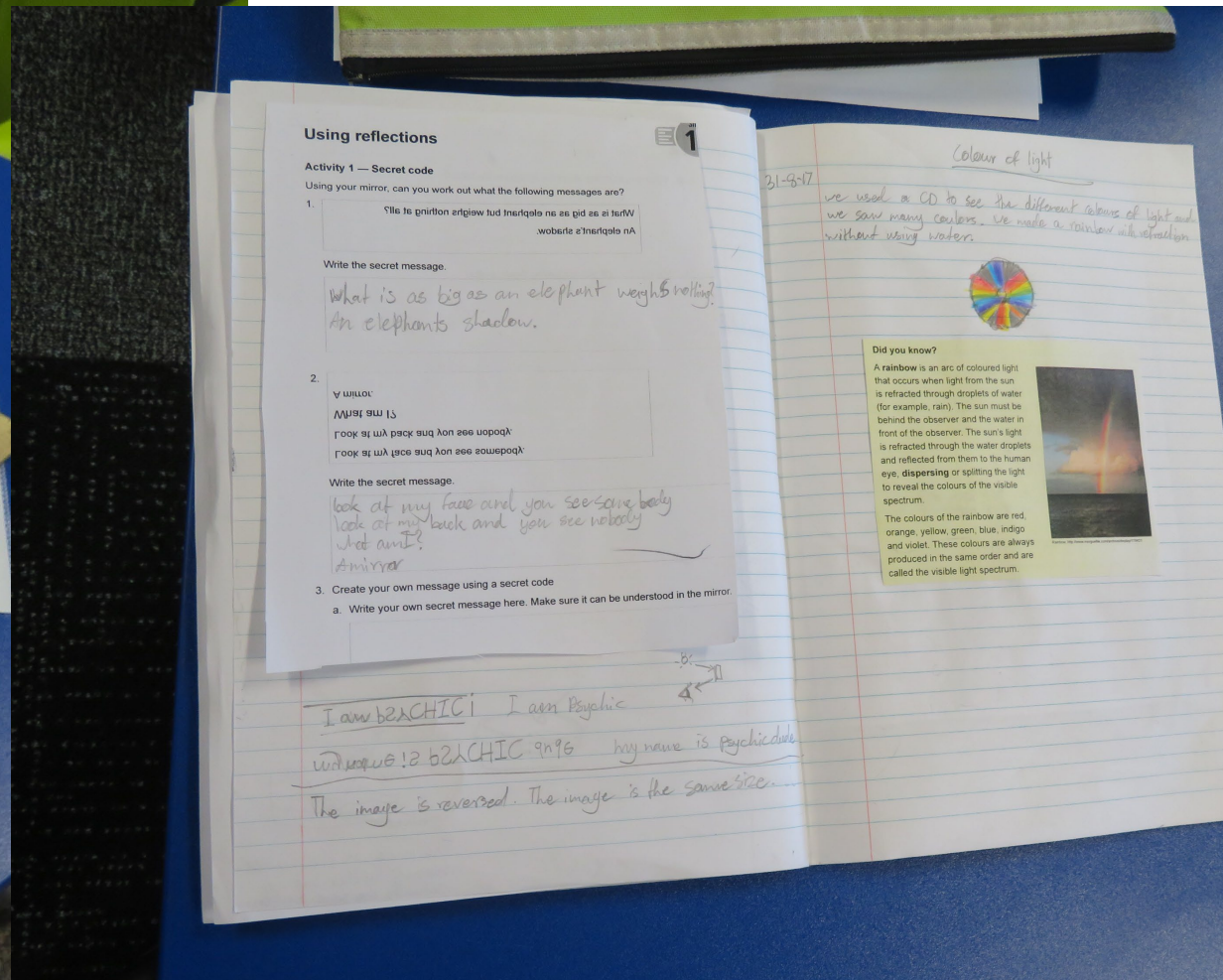
各教科、学活、総合のノート、道徳ノートの工夫が大切（タブレットの活用も）

※　道徳ノートの工夫（タブレットの活用も）

1．事前の学習のスペースを取る
（いつも何らかの課題を出す）
2．授業で自由にメモできる頁を1頁取る
（自由にメモできるようにする。板書に関する記述も）
（その頁に後で板書の写真やプリントも貼れるようにする）
3．中心発問に関する記述のスペースを取る
（友達の意見で参考になったことなども書くようにする）
4．自分とのかかわりで記述するスペースを取る
（そこから自己課題を書けるようにする）
5．今日の授業の自己評価項目を示し評価ができるようにする
6．事後の学習を記述するスペースを取る
（自己課題の追究や事後に気づいたこと取り組んだことなどを書く）
（3，4，5，はワークシートに記入し、授業後にノートに貼ってもよい）
★　学期の終わりに学んだ全体を振り返り、自己評価、自己課題なども記入できる頁を創っておくこともポイント

オーストラリアのブリスベンの小学校における
ノートによる指導（ノートで自分用テキストを創る）





３－３　多様性を受容しともによりよい自己、よりよい社会を目指す道徳力を育む

（多様な教材、多様な課題、多様な思考、多様な学習形態による学び）

・道徳教育、「特別の教科　道徳」の授業を充実させるためには、（１）未来への肯定的感情を育む（絶対的信頼感の確立）と（２）自己の成長を確認できる取組を継続する（自己形成ノートによるリフレクション）を踏まえて、（３）多様性を受容しともによりよい自己、よりよい社会を目指す道徳力を育む必要がある。

・ここでは、①社会の変化、社会の課題に向き合う道徳学習と、②道徳の授業における多様性を受容し、展開する指導過程について考えてみたい

①　社会の変化、社会の課題に向き合う道徳学習

　地域、国内外の様々な社会的実態や課題に気づき、関心を持ち、考え、対応を考える機会を計画的に設ける必要がある。**情報科**を新設することも考えられる。廊下に世界地図、日本地図、県地図、市地図、地域地図を掲示し、その横に1週間ごとに新しい情報を子どもたちが分担して更新していく取り組みも行いたい。各教室には「道徳コーナー」を設けてその週の道徳の授業で取り上げた教材や補助資料、話し合ったことなどを掲示して継続的に考えられるようにしたい。

（授業の前の学び）

・日常生活での課題や地域課題、社会や生活の変化や課題に関する学習
・実態を学んだり考えたりして理解する教科等の特質に応じた学習　等

（道徳の授業での学び）

社会の変化、社会的課題等を人間としてどう生きるかという側面から考え自分（自分たち）の生き方の自覚へ（情報へのかかわり方や自己規律の確立も含めて）

（授業後の学び）

自分（自分たち）にできることを実践する。
さらに実態を調査し理解を深めながら自分（自分たち）の生き方を考え実践へとつなげていく。　等

※　プロジェクト型道徳学習の推進

社会的課題等は子どもたちがこれからの社会をどう生き抜くかに関わる課題である。自らの生き方とかかわらせて追究することが大切であり、そのためには、「特別の教科　道徳」の学習を要として、実態を知る学習や調べる学習、実際に取り組む学習等をつないで課題を追究する学び（総合単元的な道徳学習）が必要。「特別の教科　道徳」を取り入れることによって、道徳性全体の発達とかかわらせてこの学習を位置づけることができる。

ポイント

・できれば、具体的な創造表現物や行動目標を考え、それを人々に示したり実践することから効果を実感できるようにしたい（人に役立つ体験、人に喜んでもらえる体験を考える）
・計画段階から子どもたちも参画し取り組みながら柔軟に活動を発展させていったり修正したりする（適宜評価活動を入れる）。
・保護者や地域の人たちや専門家の人たちにもかかわってもらうようにする。
・特に地域住民（高齢者家庭など）の情報格差（Digital Divide）への対応も取り入れたい。

※　多様な教材の開発

- 教科書の教材を確認したうえで、多様な教材を開発することが大切。様々な社会や生活の変化の中でどう生きるかを考えることができる教材を開発したい。

・教師が探す
・子どもたちが探す
・専門家に提供してもらう
・他の学校で使っている教材を共有する
等

→

・教師たちで教材化し指導案を創る（補助資料、教具、ワークシート等も）
・子どもたちと一緒に教材化し指導案を創る（補助資料、教具、ワークシート等も）
・他の学校で使っている教材を検討し指導案を創る（補助資料、教具、ワークシート等も）

→

・授業実践を通して修正する
・教材、指導案、補助資料、教具、ワークシート等一式をセットにして保管する
等

②　道徳の授業における多様性を受容し、展開する指導過程

- 様々な道徳的状況や課題に対して、それぞれの感じ方や考え方などを出し合いながらより多様に考え、話し合い、共通理解を図りながら、どうすればいいのかを判断し行動やさらなる思考へとつなげていく指導過程が求められる。
- 特に課題となるのは、いかに多様な意見を引き出すかと、多様な意見をどのように整理するのか、またどのように自己を見つめこれからのことを考えられるようにするのか、が考えられる。
- 道徳の授業では、どの授業においても、目指すべき目標は、「よりよい自己の形成とよりよい社会の形成」である。その目標を共有する（確認する）ことによって、多様性を受容できし議論を深めることができる。
- 特に大切なのは寛容の心を育むことである。

②－１　道徳の授業で子どもたちに育んでほしい信念

○　自分は必ずよくなる（自分を信頼）

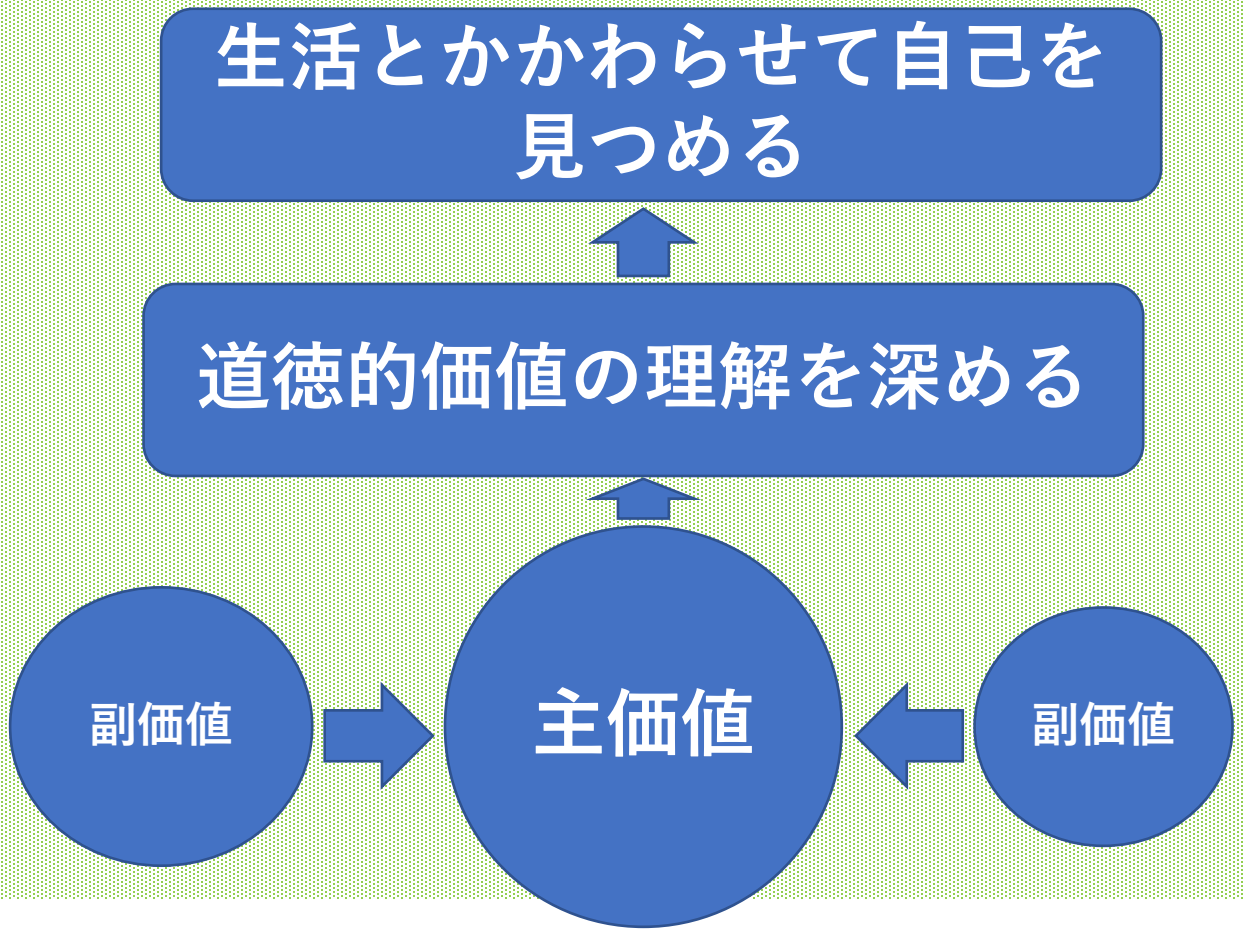
○　だれもがよりよく生きようとしている
（先生や友達を信頼）

○　みんなと一緒によりよい集団や社会をつくっていける
自分もみんなも成長できる（未来に対する絶対的信頼）

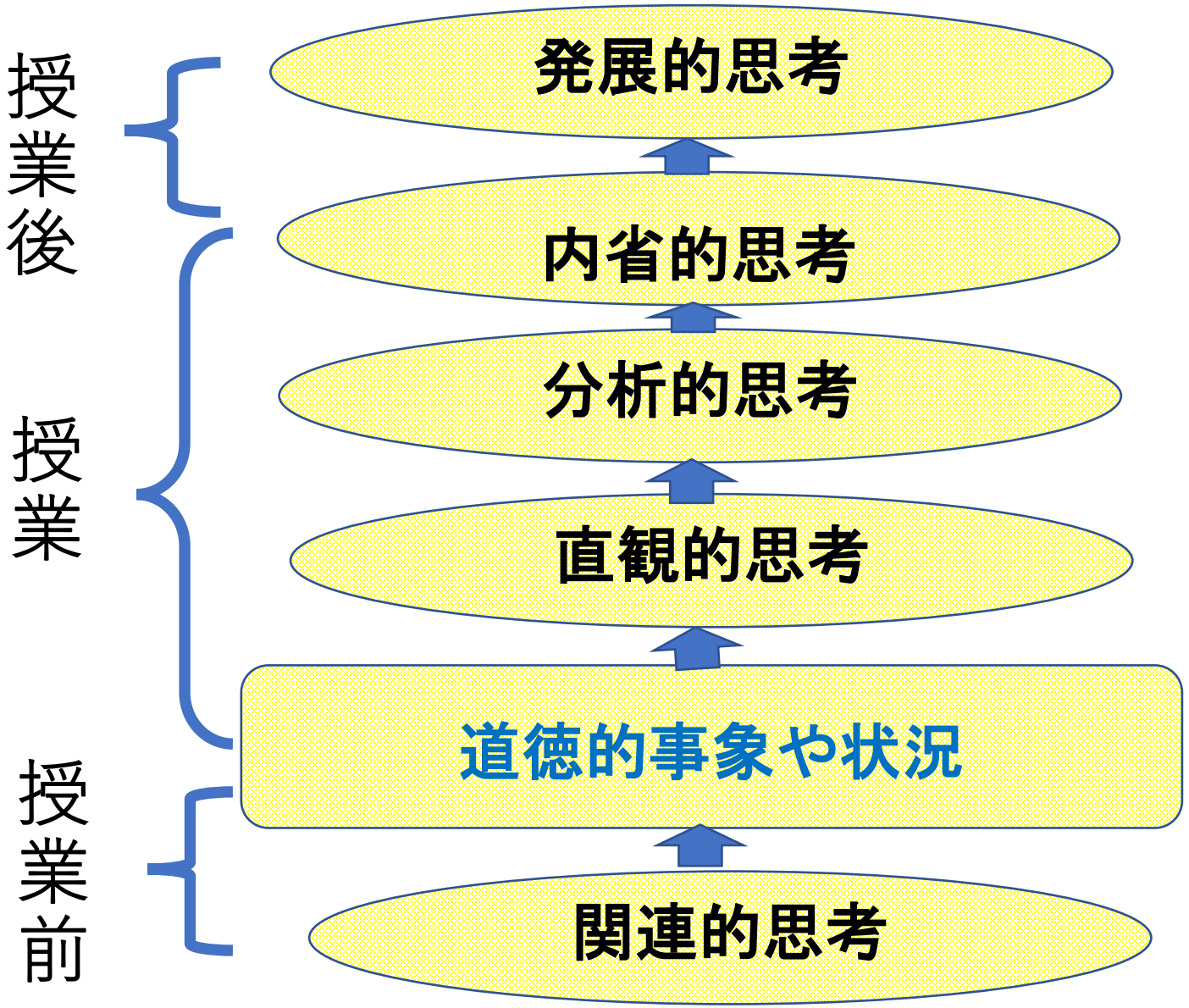
★　以上の信念につながる**想像力（イメージする力）**や**構想力（創造する力）**を育むことが大切。それは、**わくわく感、期待感**をもてる授業にすることでもある。

②－２　主価値と副価値を押さえる

教材分析しながら、副価値を明確にする。そして主価値と副価値とをどのように関わらせながら授業を展開できるかを考える。そのことで主価値の理解を深め自己を見つめられるようにする。



②－３　道徳の授業における基本的思考の流れ



②－４　直観的思考

道徳的な事象や状況に対して感覚的に感じること

例えば、どうしてだろう、すごいなー、楽しそうだなー
悲しくなるなー、やってみたいなー　等

↓

道徳的価値に気づいたり、興味をもったり、新たな考えに気づいたりするきっかけとなる

②－５　分析的思考（多面的・多角的に考える）

（道徳的価値の理解を深めることは様々な視点から考えることと関係する）

１　思考軸を移動させる

・対象軸（立場を変えて考える）
・時間軸（時間を移動させて考える）
・条件軸（条件を変えて考える）
・本質軸（どうして,そもそもを考える）

２　思考形態を変える

・疑問的思考
・批判的・論理的思考
・ケア的・心情的思考
・創造的・発展的思考

３　思考ツール

（思考を促すための手立て）

・構造的な板書
・心情曲線
・心の綱引き
・天秤棒
・線上での位置
・階段図
・ウェブ図
・4象限図
・分割図
・Y字図
・鏡餅図
・水に浮く氷図
・ランキング
・グルーピング
等

※　出された意見を整理する

★　出された意見を子どもたちの意見を基に整理することが大切

A
主価値に関わる意見

B
副価値１に関わる意見

C
副価値２に関わる意見

D
他の考えからの意見

E
思いつき的な意見

・まとめると考えると本時のねらいを強調することになりがち
・まとめるのではなく、どのような意見が出ているかを整理することが大切
・そのことで全員の意見が尊重される
・そこには副価値的なもの等があるはず。それらを主価値（本時のねらいとかかわる道徳的価値）との関連でとらえられるようにもっていく
・そのことによって主価値の理解を深めるし、より自分の生活とかかわらせてとらえられる

②－６　内省的思考

道徳的価値に照らして

私

・今までの自分（自分たち）
・今の自分（自分たち）
・これからの自分（自分たち）

私たち

自己課題・我々課題を明確化

②-７　価値観多様化時代において いかに寛容の心を育てるか

（憎しみを乗り越える力の育成が大切）

憎しみからは何も生まれない
（憎しみを繰り返していくだけ）
憎しみを乗り越える力をどう育てるか

違いと同時に共通の課題（目標）を見出す
共通の課題（目標）に対して一緒に追い求める
そのための知恵を道徳の授業で学び、日常生活や様々な学習活動の中に生かしていく
（腹の立つ、許せない相手に対して相手の立場に立って考えることは簡単にはできない。しかし、同じ人間である、一緒に生きていかなければならないと考えた時どうすればいいのかを協働でしっかり考えられるのではないか）

※　社会的交換理論の紹介

- アメリカの社会学会会長でもあったG.C.Homansは、次のような社会的交換理論を提唱している。

  簡単に言えば、人は利益のある行動をとる、というものである。

  Profit（利益）＝Reword（報酬）－Cost（費用）

この理論を応用するならば、様々な道徳的事象や状況において、何をReword（報酬）と考え、何をCost（費用）と考えるかを考え、道徳的な行為をProfit（利益）のある行動としてとらえられるようにするという視点からのアプローチも可能ではないか

RewardとCostを精神的、物理的、身体的な側面からとらえる

何を報酬ととらえられるようにするか

・道徳的価値を身につけること（人間として成長すること）

・相手が喜ぶことをすること

・社会に役立つことをすること

これらのことに、喜びを感じる（報酬）ことが、そのためのCost（費用）、例えば、時間がとられる、相手に関わるのが面倒だ、身体が疲れる、お金がかかるなどよりProfit（利益）があると捉えられるようになることが大切。

そのためには、道徳の授業と学級の風土（生活を通してProfitを実感できる）が大切

**「たとえ明日世界が滅亡しようとも、
今日私はリンゴの木を植える。」**

Even if I knew that tomorrow the world would go to pieces, I would still plant my apple tree.

ドイツの宗教家マルティン・ルターの言葉